

大統領暗殺事件 ②

「北へ連れて行かれる」とは、90年代の内戦時、首都ブラザヴィルの南部地区の人たちのなかで恐れられていた表現である。「北」のどこかで秘かに「葬られる」こと、つまり「処刑される」といったニュアンスがあるからだ。90年代に複数政党制が導入されると、独裁制のなかで抑えられていた部族のアイデンティティが刺激され、南北の対立が表面化する状況のなかで出てきた表現である。

北と南との緊張関係は、1960年の独立以前からすでであった。コンゴでは「nordist」(北出身者)と「sudist」(南出身者)という表現で、出自の違いが言い表されている。これはアメリカ南北戦争に使われていたフランス語の表現から来たものだ。コンゴはまた言語的に見ても、北のリンガラ語に対し南のキコンゴ語と大きく二分することができる。植民地時代は、大西洋へのアクセスがあり、内陸からの物資輸送の鉄道が敷設されている南の人たちが、経済活動や行政への関与の面で北の人たちより有利な立場にあったと言えるだろう。独立後、初代と二代の大統領が南出身者だったのにはそうした背景があったと思われる。植民地のいわゆる「分断統治」によって、またヨーロッパの都合で決められた「国境線」が独立後もそのまま「一つの国」として固定化されたことによって、一つの国のなかで出自による差、民族による格差が生まれたのである。

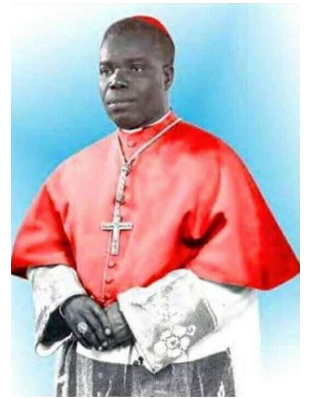
独立後3代目の大統領となったマリアン・ングアビは北出身者である。1977年3月18日、その大統領が暗殺されたのだから、南側の仕業だと見なすのは必然的な流れだったのかもしれない。しかも暗殺の実行犯は、その真相を明かすことなく殺害されてしまったため、だれが暗殺の黒幕なのか分からない状況で、よりいっそう南側の関与が疑われたのではないだろうか。そして実際に南出身で重要な立場にあった2名が、「北」のどこかで「葬られる」事態に発展するのだった。

真っ先に疑われたのは、マサンバ・デバ前大統領だった。ングアビ大統領が暗殺された数時間後には、彼の身柄は軍によって拘束された。そして取り調べのなかで、彼は暗殺計画を「自供」したのである。ただそのときの証人によれば、拘束されている間、前大統領はかなり酷い拷問を受けたと言われている。大統領に代わる暫定的な「党軍事委員会(Comité militaire du Parti)」が主導する軍法会議によって、彼に暗殺の首謀者として死刑が宣告された。そして3月25日の夜、人知れず秘かに刑が執行されたのだが、どこで、どのようにされたのかは明らかになっていない。また、彼の遺体は家族のもとに返されることもなかった。彼はまさしく「北」によって「葬られる」ことになったのである。

もう一人は、コンゴで初めて枢機卿になったエミール・ピアエンダ(Emile Biayenda)である。キンダンバ(Kindamba)生まれのいわゆる「南出身者」であった彼もまた、大統領暗殺事件に関連して「北へ連れて行かれる」運命にあった。

ピアエンダは1927年に生まれた。1937年から1944年までカトリック系学校に通った彼は、将来の司祭になることを決意し、さらにカトリック系の学校に進み、首都に出て神学や哲学を学んだ。1958年10月26日、聖職者(prêtre)の資格を得て、首都の第5区であるウエンゼ(Ouenzé)に配属された。1959年には助任司祭(vicaire)となり、その後さらに司祭(abbé)

から主任司祭職(curé)へと順調に昇級していった。1965年10月から1969年5月までは、フランスのリヨンで神学を学び、神学の博士号を取得した。ブラザヴィルに戻った彼は、1970年3月に大司教となり、やがて1973年3月、パウロ6世法王によって枢機卿に任命された。当時、アフリカ大陸のなかでも一番若い枢機卿(cardinal)であった。



エミール・ピアエンダ枢機卿

こうした彼の影響力が社会のなかで大きくなっていくとともに、独裁政権は政治的な混乱を引き起こしかねないとして、政府から警戒されることもあった。実際に拘留されたり、拷問にかけられたりしたこともあったようである。また、拷問による深い傷は生涯残っていたという。

1977年3月22日の夜、突然3人の軍人が彼を車で連れ去り、北へ続く道を進んだ。大統領暗殺事件から4日目の出来事である。彼はその時すでに自身に降りかかろうとしている「運命」を察知していたとも言われている。枢機卿が実際どこでどのように殺害されたのかは、さまざまな説がある。ただ、彼の遺体には銃弾の跡や致命傷となるような傷跡がなく、また衣服も血で汚れていなかったようである。そのことから、生きてままだ埋められたのではないかと言われたり、あるいは、銃弾は放たれたが彼の身体に決して当たることはなかったといった「奇跡」話も生まれたりしている。

なぜ、彼が殺されてしまったのか？ 理由は大統領が暗殺される30分前に面会したのが彼だったからだ。そのことによって彼が大統領の暗殺の実行犯と思われたのである。そこには、彼が南部出身で政治的に危険視されていたということも影響していたのかもしれない。また彼は共産化を進めるデバとングアビの2人の大統領に対して、その道を断念するように説得したという説もある。さらには、彼が大統領の「力」を呪いによって「取り除いた」という説もあるようだ。いずれにせよ、実行犯は殺害された大統領側近の軍人だったが、党軍事委員会はこの枢機卿殺害を糾弾し、暗殺された大統領と合わせて国家的な喪に服することを宣言した。

現在、ブラザヴィルの北方に「エミール・ピアエンダの丘」と呼ばれる小高い丘がある。枢機卿が生きてままだ埋められたと言われている丘である。そこには記念碑や十字架が立てられ、今日では彼の思いを受け継ぐ人々にとっての重要な巡礼地となっている。一方、デバ大統領の名誉は1991年の国の全権会議で回復した。ただし、彼の遺体がどこに葬られているのかは、未だ明らかにはなっていないようである。街の中心にあるマリアン・ングアビ大統領の霊廟と比べると、その扱いの差は歴然としたままである。



エミール・ピアエンダの丘